

# The Asahi Shimbun GLOBE

1 | 3  
January 2021 No.237



photo: Iwanami Yuki

## 心のレジリエンス

相次ぐ災害や事件・事故、そして新型コロナウイルス。人は不条理ともいえる悲しみにどう向き合い、再生していこうとしているのか。悲嘆にくれ、喪失感を抱えながらも、前を向いて生きていく。

そんなレジリエンス(復元力)をさがして。

星野真三雄、山本大輔、渡辺志帆、高野裕介、河原田慎一(文中敬称略)

### 二つの時計が刻む10年

あの日から一方通行で進む時間が重く  
のしかかる。

宮城県石巻市の佐藤美香(45)は、東日本大震災で長女の愛梨(当時6歳)を亡くした。高台にある幼稚園は津波を免れたが、長女たちを乗せた送迎バスが津波にのまれ、火災に巻き込まれた。

地震発生から2日半近くたった2011年3月14日午前0時過ぎ、眠っていた当時3歳の次女(13)が急に泣き出した。「ママ! ママ! 汚い!」と叫ぶと、すぐに力が抜けたように眠る。また突然起きて、「ママ、大好き」とだけ言った。「あれは愛梨の口調だった。最

後に別れを告げに来てくれたんだろう」

遺体が見つかったのは、その数時間後のことだった。海側から幼稚園に向かう坂道に黒いバスの転がり、近くのがれきの下に3人の園児が抱き合うように倒れていた。顔はわからなかったが、11日朝に着せた白いジャンパーの切れ端が肩に残っていた。「抱きしめたかったけど、崩れてしまいそうできなかった」

毎年、長女に手紙を書く。「愛梨に思いを届けたい」からだ。3月の命日には、墓がある石巻市内の寺で供養してもらっている。最初の1、2年は娘に話しかけるように書くことができた。ところが、「年月を重ねるにつれ、どの年齢の愛梨に書けばいいのかわからなくなった」。時がたてば心も落ち着いて書きやすくなったと思ったが、逆だった。

6歳の時はほぼ平仮名しか読めなかった。でも、学校にあがれば漢字も読めるようになってはいるはずだ。平仮名で書けばいいのか、漢字で書けばいいのか。興味や関心も変わっているだろう。そんなことを考え始めると、つ

らくなりペンが進まなくなる。

昨年3月、幼稚園の同級生が長女の写真を囲んで撮った中学の卒業式の写真を届けてくれた。同級生は幼稚園のころの面影を残す子もいれば、まったく様子が変わって気づかない子もいる。生きていれば、いま高校に通っているはず。でも、記憶に残る娘は6歳のまま。頭の中でその時間の差を埋められない。涙が止まらなくなった。

「私の心には二つの時計がある」

決して交わることのない二つの時間。手紙を書くときは、6歳のままなら読めないかもしれないから、漢字の上には必ず仮名をふる。そして最後にこう書く。「愛梨のこと 大好きだよ 愛しているよ」

今年3月で東日本大震災から10年になる。2万人近くの人々が突然、別れを告げられないまま時間の流れを断ち切られた。「あの人に伝えたい」。思いを手紙につづること、大切な人を失った悲しみから少しずつ前に進もうとしている人たちがいる。●  
(星野真三雄)



**Daiwa House**  
大和ハウスグループ

*Grow a new Life*

新しい生活を育てよう